インド活動報告

平成26年度1次隊　庄原裕美

　灼熱の夏と凍える冬。両極端な季節を2回ずつ経験して、あっという間に私の任期も終わりが近づいてきました。喜怒哀楽が濃縮された1年8ヶ月を経て、インドの人たちには「感謝」の一言です。ほとんど何も知らないところから始まり、今、大好きな国となったインド。今回は、異文化での生活のベースとなった、住むところと日々の食べ物についてご紹介しようと思います。

1．インドの家

　活動先の学校から徒歩5分。住宅が集まる奥まった通りに、私の住むアパートがあります。5階建ての最上階で、すぐ下には大家さん夫婦の部屋が。日本だと、安全面などから上の階が人気だと思うのですが、ここインドで圧倒的に好まれるのは1階。その理由は、夏涼しいから。トップフロアに住むことになったときは、周囲の人に「相当暑いよ。大丈夫？」と心配されたものですが、扇風機やエアコンで、なんとか乗り切ることができました。

　この家に住んで、びっくりしたのは周りの音です。特に顕著なのが、向かいのお寺から聞こえるお祈りの歌と、結婚式のお祝いで流れる爆音ダンスミュージック。お寺では、祭日にお祈りの会が開かれるようで、老若男女が打楽器に合わせて代わる代わるヒンドゥー教の歌を歌う声が、マイクを通してクリアに聞こえてきます。長いときは午後3時ごろから夜の9時ごろまで！インドの人の信心深さに心底驚かされました。また、結婚式シーズンである冬、近くの公園の特設会場でよく結婚式があるのですが、ノリいい曲が深夜までリピートされるのには正直参りました。インドに来た当初は、気になって眠れないことや、耳栓を使ったこともありましたが、すっかり慣れた今、爆音でも気にせず寝ています。外国の流行曲が流されるのは皆無で、インドのダンスミュージックが100パーセント選ばれているのが興味深いと思いました。日本人は、もれ聞こえる音はすべて「騒音」としてしまいがちですが、インドの人は、音に対してとても大らかなようです。

　他にも、慣れによって気にならなくなったことはたくさんあります。例えば、しばしばおこる停電とか…。その他、水漏れや鍵の故障など、不具合もたくさんありましたが、こちらは活動先の手厚いサポートで、一つ一つ解決しました。今は、この家が気に入っています！部屋に隣接する、大家さんの庭の、バラやマリーゴールドなど、色とりどりの花の鉢に心癒されます。花の世話をする大家さんと、知っている限りのヒンディー語の単語を使って、世間話をするのが楽しみです。



【大家さんの庭】

2．インドの食べ物

　宗教上の理由でベジタリアンが多いインドで、私もほぼベジタリアン生活を送ってきました。私の理由は、徒歩圏内に肉屋さんがないからというだけなのですが、スパイスとの組み合わせで野菜だけでも味わい深い料理となり、帰国してからも作り続けたいほどです。基本のスパイスや、家庭料理のレシピを教えてくれた、ホームステイ先のお母さんと同僚の先生に感謝です。一方、外食するときは、普段食べられない肉や魚を楽しんでいます。ニューデリーには日本食のレストランもあり、どうしても日本の料理が食べたくなったときには行くこともできますが、やはり高価なので、家族や友人に送ってもらった調味料などで、日本風の味を工夫していました。たとえば、細長くてドライな質感が特徴のインドの米でしょうゆ味の炊き込みご飯を炊いたり、北インドの主食である平らなパン、チャパティに、お茶漬けのもとを練りこんで焼いたり…。日本で食べなれている味が加わると、インド料理も違った味わいになり、個人的には気に入っていましたが、インドの人たちはびっくりすると思うので、味見はしてもらっていません…！

　食事を作る上で、欠かせないのが食材の買出しです。赴任直後は、これがストレスでした。日本式のスーパーマーケットを期待していたのですが、活動先の周りには、そのような店は1軒もなく、店番のおじさんにほしいものを一つずつ伝えて出してもらうという昔ながらの商店のみ。私のヒンディー語が不自由なこともあり、1回1回の買い物が緊張の時間でした。ですがこれも、今となっては笑い話です。いったん「近所に住んでいる」と認識されると、おじさんたちはとても親切。顔を見るやいなや、いつも買うものを出してくれたり、小銭が足りないとき「次回でいいよ」と言ってくれたり。息子さんが日本語を勉強しているということで、わざわざ奥から呼んできて、日本語で接客を受けたこともありました。相変わらずヒンディー語がへたなので、話が盛り上がらないのは残念ですが、顔見知りのおじさんたちがいると思うと、インド生活も安心です。

　インドへ来る前は、不安でいっぱいだったのですが、活動先や地域のインドの人たちの助けがあって、インド生活を心から楽しむことができました。応募を決意したときから継続してサポート頂いた鳥取県と、あたたかく見守ってくださった県民の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。インドでの経験を、これからの教員生活を通して、学校現場や地域に還元していきます。締めくくりは、出会いと別れ、両方の場面で使われるこのあいさつで。Namaste！次は鳥取県でお会いしましょう！

